

# 孫睿“青春三部作”に見る「虚無」の位置づけ

——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い——

高屋 亞 希

## 1 はじめに

中国文学批評界では2004年、80年代世代作家のメランコリックな作風が話題になった。人生・社会に対して積極的態度ではなく、感傷的で絶望的な態度で関わる青春像を描いた作品が目立つ、というのが曹文軒らの発言の趣旨であった<sup>1)</sup>が、これは広く同時代の青春小説を考える上で大事な論点と言えよう。というのも、人生・社会に対して積極的に取り組むことが無意味だという「虚無」感<sup>2)</sup>が、中国同時代を彩る精神的なトレンドとして、様々な青春小説において繰り返し描かれているのは事実だからである。

例えば“村上春樹に酷似”を謳い文句に、2001年に話題となった李修文の長編小説『滴泪痣』<sup>3)</sup>では、「虚無」感が主人公の意識を規定するものとして描かれている。小説では主人公が何かを夢見て人生の選択をしようとする瞬間、決まって「虚無」感に襲われて夢を實現したいという意志が消え失せ、その結果、モラトリアムを續けるという設定になっている。その一方、主人公はなぜ「虚無」感に支配されるのかという点について、早くに両親を亡くした生い立ちが反動となり、いつまでも両親に庇護された子供のままでいたい、という主人公のモラトリアム願望を理由にあげている。つまり同小説において「虚無」はモラトリアムの原因であると同時に、その結果でもあるというトートロジーの如き位置づけと言えよう。従って「虚無」と青春期のモラトリアムを結びつけようとする書き手の意圖は理解されるものの、両者が具体的にどのような関係にあるのかという点は勿論、同時代小説に広く共通する「虚無」感との関係についても答えを見つけるのは困難である。これは『滴泪痣』の欠陥と呼べようが、逆に言えば同時代中国において若者が人生・社会に対し、「虚無」的態度で向き合うことが自明視されているために、書き手が読み手に對してそ

の設定について贅言する必要性を感じなかった結果とは考えられないだろうか？

本稿では中国青春小説における精神的トレンド、即ち「虚無」が具体的にどういう状況を指すのか、同時代社会においていかなる意味を持つのか等の問題を考察するが、考察に際しては紙幅の関係上、主として2004年に話題を呼んだ孫睿<sup>4)</sup>の長編処女作『草様年華』を分析対象とし、必要に応じてその第2作『活不明白』と第3作『草様年華Ⅱ』、いわゆる青春三部作<sup>5)</sup>を扱う。『草様年華』は主人公である北京の大学生が自身の些か情けない学生生活を戯画化したもので、第2作は卒業後も就職先が見つからない失業生活が、第3作では会社をクビになり大学院を目指す受験生活が描かれている<sup>6)</sup>。いずれも主人公は自嘲的な視点から描かれており、主人公を襲う「虚無」感についても戯画的に対象化されているため、この問題を考える格好の例を提供してくれると考えられるからである。もとより数編の小説で同時代小説における「虚無」表現の全てをカバーしうるわけではないが、議論のプラットフォームを構築する作業の一環と理解されたい。

## 2 存在価値の「虚無」化

『草様年華』は北京師範大学がモデルと思しき北X大を舞臺に、趣味の音楽と恋愛には熱心に取り組むものの、本業の勉学では全くその内容に興味を持たず、いかに努力せずとも単位をとって卒業するかに腐心する邱飛と、それを取り巻く悪友らの青春像をシニカルな筆致で描いている。小説結末部分で邱飛は卒業を目前に控えながら就職が決まらず、恋人にも度重なる浮気に愛想をつかさられ捨てられてしまう。エリート予備軍の一員であるにも関わらず、望むような社会的ポジションが存在しないという現実を突きつけられ、不本意ながらも就職して青春の終わりを実感するという内容である。

それでは大学時代を通じて、邱飛は具体的に何を目指していたのだろうか？小説は大学合格した時点から始まるが、そもそも合格した北X大機械科は自分の意志で選択した学科ではなく、当時付き合っていた彼女が邱飛に無断で願書を書きかえていた、という設定になっている。もっとも邱飛自身が記入して

いた志望も、どこでも大學に入れさえすればよいという觀點から、超不人氣學科を敢えて選擇していたとも明かされているので、元より邱飛が具體的目標を持っていたわけではないことが伺えよう。

大學で新しい彼女を見つけること以外、具體的目標や氣力を欠いた大學生活で邱飛を最も悩ますのは學期末毎の試験である。どこから手をつけてよいかも分からない状態に邱飛は茫然とするが、悪友と對策を講じた結果、假病を使って2科目を追試にまわして他の科目に全力を注ぐことに決め、その判断の根據を正當化する。

どの授業擔當者も分厚い教科書を5ヶ月で解説し終えるが、その講義内容は最終的に100點の期末試験答案、薄っぺらな數枚の答案用紙に落ち着くに過ぎない。従って一冊を丸々理解する必要はなく、100點中60點だけマスターしていればよいということになり、即ちエッセンスを取って不要部分を捨てるのである。いったい何をエッセンスとするのか。その答えは過去問の中でいとも簡単に見つけられる。(中略)先生方は住居の分配や職階の評定など切實なことには積極的態度を見せるものの、試験問題を出すことについては使い回し主義、即ち過去問を今年もう一度使う方法を採用している。(中略)従って過去問さえ一つ一つ理解していれば、すんなり試験に通ることができるというわけだ。(p89)

講義の理解度は試験によって測られる。であるならば、と邱飛は講義を聴き理解するという過程をとばし、試験結果のみを問題にして論理を轉倒させている。邱飛は試験問題こそが半年に及ぶ講義全體のエッセンスなのだとおぼき、事前に試験問題を入手しそれをマスターするためにエネルギーを注ぐだけで十分であるとしている。無論、邱飛は本氣でこれが正攻法だと信じているわけではなく、過去問をそのまま使い回す教師の怠惰を皮肉っていることから、邱飛も自身の論理が屁理屈であることを十分承知していると言えよう。この屁理屈の後、追試にまわすことに決めた例の2科目は、過去問を入手して調べた結果、問題が年毎に異なっていることが判明し、講義全部を理解するという正攻法しか對處の仕様がないうという記述が續くに至って、正攻法では齒がたたな

い邱飛の劣等生ぶり<sup>7)</sup>が読者にも明らかにされている。また追試にしてもらうため、假病を使って本試験を欠席する許可証明を得ようと、悪友と悪戦苦闘する無様がユーモラスな筆致で延々と書き込まれており、果たして邱飛が主張するように、エッセンスのみを入手し理解する方法が正攻法より省エネルギーな攻略法と言えるのか、極めて疑わしい状況を小説は戯畫化していると言えるだろう。

こうした冴えない劣等生が、教師や學校に對する皮肉と諦念を混ぜながら、自身の劣等生ぶりを読者に曝しつつ、開き直って屁理屈めいた論理で正當化してみせる。これが『草様年華』全編を貫く基調であり、読者に支持された点であろうと推測するが、ここではとりあえず邱飛がどう正當化してみせるにせよ、自他ともに認める劣等生であるという事實を確認しておけばよいだろう。

邱飛は更に“學習の成績は何を證明するのか？何も證明できやしない。單に現行の教育制度によって壓迫・同化された程度と正比例をなすパラメータに過ぎない。”(p90)と、自身が劣等生であることに開き直った解釋を續ける。小中高大學と數々の試験競争に自身も参加することによって、このエリート校にいる現實を不問にした上で、優等生とは教育制度にどれだけ同化しているかというパラメータであると定義付け、自分の價値は劣等生であることによって測られないという文脈につなげている。そして要は、劣等生は制度への同化や己の異化を意識的に拒んだ結果なのだ、と劣等生の價値を稱揚してみせているのである。邱飛という存在の價値が試験成績のみによって測られるものではないことは言を待たないが、大學からのドロップアウトをこの時點で考えているわけでもなく、また試験で無様に悪戦苦闘する姿が散々語られた後では、この解釋は阿Qの論理と呼んで差し支えないだろう。そもそも制度への同化を拒んだ自己にどういう價値が備わっているかも明らかにされておらず、そのことが小説全編、ひいては三部作を通した主人公の悩みともなっており、例えば『草様年華II』では大學院受験を決意した後に、どの専攻に進むかを延々悩む場面が描かれている。

もっとも教師が毎年、同一問題を使い回すのが常態化していることは、試験という脅しが機能していないことを意味し、一般的に講義を眞剣に聞く努力を學生に求めるのは難しいだろう。遊び暮らした夏休み明け、本試験を欠席した

2科目の追試が控えているが、“80元で合格が買える”(p101)、即ち80元を拂って3日間の補講を受けさえすれば、全講義のエッセンス、追試に出題する問題と答えを丸ごと教えてもらえるため、慌てふためく必要は全くない。

追試成績が発表され、一方ならない喜びに襲われた。2科目とも合格で、理論力學の成績は何と〔注：優等生の〕張超凡よりずっと高得点の88点だったからである。これに對して張超凡は憤り不公平だと感じたが、この科目を理解している程度で言えば、僕より彼の方がずっとずっと理解しているわけだから、その感情はもっともと言うべきだろう。(中略)今後の勉學を無駄にしないためにも、こんなつまらないことにケチケチと目くじらをたてて頭を悩ませることなどないよ、と僕は張超凡にアドバイスしてやった。(中略)今のこの世界は既に公平とは呼べず、不公平を感じるのもよくあることなのさ。(p101)

教師が單位という自分が持つささやかな權力を、私利私欲を満たす機会と見なすことで、試験制度を形骸化させてしまう構圖が伺えよう。單に學則が保證する追試を嚴正に行うのではなく、補講と稱する個人レッスンを有償で開講し、しかも追試問題を丸々傳授するという特典をつけることで、教師は劣等生の弱みにつけ込んだ小遣い稼ぎが可能となり、講義をまじめに聴講した優等生が拂う努力は、こうした教師の私利私欲を前に邱飛以下の評價しか與えられない。邱飛は自分より劣等生の某悪友は教師につけ込まれ、100元札で支拂った補講参加費の釣り銭20元を返して貰えなかったかわりに92点の高得点だったと、どう仕様もない現實の不公平を前に心を煩わせるだけ無駄だと慰める。

教師らが私利私欲を優先することで生じる教育制度の形骸化は、小説全編を通じ現れる。例えば自著を受講生に購入させて名簿にチェックし、單位との關連を示唆して暗に購入を強制する教師(p213)、また大學院推薦枠を巡って優等生の張超凡が、成績は劣るが役人の親を持ち經濟力に勝る同級生に教師への賄賂攻勢で破れ、勉學だけでなく“多方面の要素を考慮した”(p246)結果だと教師に開き直られる等、こうした例は枚舉に暇がない。單位を握る教師の權力や親の政治・經濟力等を背景に自己利益を追求する數多の行爲が、公正な競争

や正当な努力から意味を奪い、ひいては競争や制度自體を空洞化させる現象は、この小説に限らず同時代中國において散見されるものであろう。何がしか權力を持つ者が自分に有利なように競争の規則を恣意的に運用することが日常的に蔓延する世界にあって、そこで得られる結果は個人の努力と結びついていっているのではなく、親の經濟力など持って生まれた運不運の問題<sup>8)</sup>でしかない。

こうした不合理な不公平に憤り落ち込む張超凡について、その感情を“もつとも”だとしていることから、邱飛にとっても正攻法の勉學の意義は認められているのだろう。しかし不公正が常態化した現實において正攻法が持つ意味は、優等生ではあるが吃音で冴えないという設定の張超凡が象徴的なように、要領がよい周囲の劣等生らに重寶され利用される道化の意味しか持ち得ない。邱飛は意味が空洞化した制度への諦めや蔑みを滲ませながら、假病やカンニングなど制度から意味を奪う不正行爲を自ら實踐し、誰もがやっている現實だからと言ひ譯しながら、屁理屈を並べて正當化していると言えよう。しかし己のそうした行爲を振り返った時、それが自分にとって楽しくもなければ、己の實力に繋がるような意味すら残してもいない、即ち無意味な行爲を行うために自分の貴重な青春がすり減らされていることに、邱飛は氣付いて愕然とする。

もし自分が目の前にある専門を放棄し、眞に自分が心から愛するに値する専門を探すとすれば、それは何か？ またしてもどうしたらよいか分からない茫然とした状態が、僕に近づいてくるのを感じた。學校での名状し難い空虚に身を置くことが耐えられなくなるたび毎に、僕は徒歩かバスで北京の街をまわってアテもなく彷徨うことにしたものだ。(中略) バスの脇を車が一臺また一臺とものすごいスピードで通り過ぎてゆくものの、何の目的があつて道路の上を疾走していくのか、僕には理解できないのである。(p157)

學ぶ楽しみもない上に、誠實に努力して學ぶことが往々にして踏みにじられる大學で、學ぶ意義を邱飛は探してみるが見つからない。せめて興味を持てる専門に移ることで學ぶ意義を取り戻そうにも、邱飛自身それが何であるのかも分からない。その間にも試験だけは續々と待ち構えており、邱飛も何とかそれ

をクリアしていくのだが、行き着く先も定かではないまま競争や消耗だけを繰り返すだけの生活において、己の存在意義は無意味で耐えられぬほどに軽い<sup>9)</sup>。そうした大學という場が強いる“空虚”さ、本稿の言葉を使えば「虚無」が耐え難いものと邱飛に感じられた時、決められた道路を“疾走していく”だけの行為の無意味さに疑問を呈し、“アテもなく彷徨う”「虚無」的な現實に、自ら向き合おうとするかのような行為が選擇されていることは注意を要するだろう。それでは「虚無」に向き合うことは、どのような意味が與えられているのだろうか。

### 3 「虚無」への價值付け

目的や意味が明らかでないにも関わらず、苦痛を強いる壓力だけは存在する生活への輕蔑や焦燥は三部作に共通する。就職活動を描く『活不明白』で主人公は幾度か轉職を繰り返すが、労働は時間の浪費だとの考えを披露している。

どこで働いても、何をしても、必ず時間の無駄だというような感覺到襲われる。何故なら、忙しい思いは自分のためにしているのではなく、生活に必要なものと交換すべく労働力を賣っているからである。(中略)“何故働くのか”と突き詰めて考えると、全ての行為は徒勞であり、無意味だと忽然と悟ることだろう。時間の浪費にあたらないもの、といったら何だろうか。睡眠、眠りだけは己のためにするものである。(p244)

睡眠は冗談であろうが、自分に對する利益の有無によって、行為の意味が測られる點が注目に値しよう。睡眠の對極にある無意味な行為に労働が位置づけられているが、その理由は他人を益するだけの行為だからと考えられている。ここで言う他人とは例えば上司や會社などを指し、自分がどれだけ努力しても會社の利益になるばかりで、己の利益に直結するわけではない行為として労働が解されている。

この後、廣告會社に勤める主人公は會社を通さず、私的に廣告制作を受注し小遣い稼ぎに働くが、その行為を“自分のために働く”(p256)と位置づけ、徹

夜残業も辞さない態度を見せる。つまり自分自身の利益や物質的欲望を満たす行為を労働に期待し、社会的自己実現あるいは社会・会社全体の利益への貢献など労働を巡る社会性に対しては、意識の範疇にないと言えよう。個人が私利私欲を圖ることが社会制度全体を空洞化させる原因であることを前章で見てきたが、孫睿の小説においては一貫して、他人の私利私欲によって空洞化した制度に自身の存在意義をすり減らされることへ批判的眼差しを向ける一方、自分自身の欲望を満たす行為だけは無条件に肯定されている。こうした点も孫睿の小説がどの程度、自己批評的なのかを測る指標となろう。

さて『草様年華』に戻ると、強い「虚無」感に苛まれた邱飛は、このまま無意味な勉学を続けても仕方がないと退学を決意し、期末試験を放棄してアてもなく彷徨う旅に出かける。西安への短い逃避行の後、北京に戻ってきて退学の意向を伝える邱飛に、友人が思い止まらせようと諭す。

今は基本的に何事も成し遂げていない。(中略) だけど自分が何事も成し遂げていないと思うのだって、お前が生きてきたこの22年間で〔注：学校での勉学以外の〕他のことをする機会が全くなかったからじゃないか。だからといってお前がスゴイことをやる素質が備わっていないってことじゃない。卒業後のいつか、お前だってスゴくなるかもしれないんだから、絶対に退学なんて考えるなよ。(中略)〔注：大学というのは〕知識は学べない。でもここで自分の思考方法を鍛えることならできる。(中略) もしお前が最初に大学進学をせず、適当な職場に勤めることを選択していたら、今頃絶対、自分の儲けばかり考えるセコイ勤め人にでもなって、現状に満足して何か進んで物事をやろうなんて考えず、救いようがない程ひどい凡俗な人間になっていたろう。絶対に今みたいに、たくさん本を読んだり、たくさん問題を考えたりというようにはなってなく、日がな、スポーツくじや日常のこまごましたこと、上司へのおべっかに埋もれているしかなかったと思うな。(p188～189)

小さな自分の利益に汲々としながら、その現状にささやかな楽しみを見出して安住する勤め人への侮蔑が語られ、対照的に現状へ批判的視点を持ちうる自



分たち大學生の精神的優位が説かれ、大學はそこらの勤め人よりも優位な精神性、即ち思考を鍛える場として位置づけられている。勿論、そうした精神的優位が將來の成功を約束しているわけではなく、またそもそもまだ社會的に何者でもないことを自ら認めているのだから、ここで語られる優位は自分たちの主觀に過ぎない。

しかしこれが興味深いのは、「虚無」に新たな意味が加えられている點である。つまり自らの無意味な行爲を「虚無」としてマイナスにとらえていたのが、ここでは「虚無」を認識するか否かが精神性を測る試金石となり、「虚無」は他人に對して精神的優位をひけらかすファッションアイテムと化しているのである。同時代中國において「虚無」が精神的トレンドであることを考えると、『草様年華』に見えるこの事例は、「虚無」を語ることに付きまとう優位性、及びまだ何者にもなり得ない現實への拒絶逃避の表現、といった「虚無」の多義的意味を示唆していよう。また「虚無」が稱揚されることは同時に、「虚無」表現を可能にする場としてのモラトリアム、即ち青春の稱揚にもつながり<sup>10)</sup>、青春小説が好んで「虚無」をテーマとする理由の一つと想像される。

しかし繰り返すが、まだ何者でもないモラトリアムの優位は邱飛らの主觀に過ぎない。従って現實にその優位を保證するために、“セコイ勤め人”や出稼ぎ労働者など自分たちよりも社會的・文化的階層が劣っていると見なす存在を必要とする。この逃避行から歸京した直後の描寫で、農村出身である寮の清掃員について、嫌惡感・差別感を滲ませたエピソードを、邱飛は幾つも披露している。

例えばこの清掃員が水道水を儉約せず、蛇口を最大水量まで捻って使うのは、田舎の河と都會の水道を同一視し、水道の仕組みやコストに無知であるが故だろう、との推測を邱飛は述べている。機械的に目の前の清掃作業をこなすだけで、その背後にある全體の仕組みにまで考えが及ばない田舎者に對し、行爲の意味を知的に理解できる自分の精神的優位を對比させることで己を優越化する手法<sup>11)</sup>は、前述した「虚無」を知り得る自分の精神的優位を導く方法とよく似ていると言えよう。

こうして「虚無」的現實に對して批判的に向き合うモラトリアムが、大學生の特權として發見されることで、小遣い稼ぎに熱心な大學教師も含む、目先の

利益に汲々とする勤め人たちを精神的な高みから見下ろして軽蔑する意識が小説中でより鮮明になっていくことになる。もともと邱飛は退学というリスクを選択したわけではなく、大学という場に軽蔑を示しつつも他ならぬその場に安住する自分を不問にしている上、また大学という保護されたモラトリアムの場が永遠に続くわけでもない。であるならば、ここで邱飛が発見獲得した「虚無」を語りうる己の精神的優位は就職、即ちあるポジションに安住して稼ぎを得る行為の中で、真に試されることにはならないだろうか。

#### 4 再浮上する「虚無」

現状に安住する者への軽蔑と安住を拒絶する者への賛美は三部作全体を貫いており、例えば3章冒頭であげた『活不明白』の引用では、労働への軽蔑が語られていた。また同書の別の箇所でも、経営者に辞表を叩きつけて転職を繰り返す昨今流行りの行為に対して、“なんて洒脱なんだ” (p133) と羨望の眼差しを送っている。しかし三部作の特徴は実際に自分も実践に及び辞職を叩きつけたものの、おいそれとは転職先が見つからない状況を戯画的に書き込む点であり、1つの場所に安住できない主人公の心理が利害から超越した純粋な精神性の現れでないことを対象化している。

タイムマシンに乗って10年の歳月を飛び越え、30歳以降の自分の様子を覗くのに、ドラえもんが友達にいたらと本當に思う。(中略) その結果が良くても悪くても、一目見たら少なくとも気持ちが落ち着くんだけど。(中略) 青春と富の前で僕はまだ本気でちょっと躊躇している。もしも10年後か15年後の自分の様子が見られたら、きっとそのどちらを選ぶかさっきりと決められるだろう。でも今は躊躇することしかできない。本當、まだ諦めたくないんだ。実際には、答えはもうはっきりしている。僕が躊躇しているのは、僕が青春の方をより愛していて、未来への理想に溢れているってことだ。にも関わらず僕が躊躇するのは、僕が理想を実現できるかどうか、まだしっかりした目算がないからだ。(p122)

ここで言う青春を、モラトリアムという語に置き換えてよいだろう。ある場所に腰を落ち着け、そこで辛抱や努力を積み重ねて富を得るという生き方が、完全に否定されているわけではない。しかし誰も未来を見通すことができない以上、その場で辛抱や努力を積み重ねたら確実に富が得られるかは定かではなく、大學生生活と同様、拂った努力が意味を持たない「虚無」という結果が待っている可能性も高い。またより多くの富が得られる職場が他にあるかもしれない。そうなる場合現在の職場で辛抱し小さな利益に満足することは、よりよい“未来への理想”を諦め、「虚無」に終わるかも知れない現状に甘んじることを意味しよう。つまり職場において経済的に下位にある者が劣勢を認めず、現状を否認し別のチャンスを求めて転職を繰り返す行為が、大學時代の「虚無」を対象化して精神的優越性を示す行為の延長として位置づけられている<sup>12)</sup>ことになる。そして己の存在意義が「虚無」化されるのを拒絶し続ける行為、及びその行為を是とする意識こそが青春、即ちモラトリアムと呼ばれると考えられよう。逆の言い方をすれば、モラトリアムは現時点での経済的劣勢を認めたくないため仕方なくやっていることであり、現実社会の勝者となることが内心渴望されているのが伺える。

『草様年華』でも、邱飛は卒業を目前にして就職が決まらない。「虚無」を直視し得る精神的優位は邱飛の主観に過ぎず、現実の就職戦線では何の武器にならないにも関わらず、邱飛は相変わらずドン・キホーテさながら己の精神的勝利のため戦い続ける。ある職場に試用され働き始めた邱飛は、仕事自體の苦勞よりも、“経営者の顔色を伺って行動する”(p290)のが卑屈だと辞表を叩きつけ、“胸中の鬱憤を晴らす”(p291)。

[注：試用期間中は] 両者の間には從屬關係が存在しないのだから、ボスに對してペコペコ諂う必要などなく、話していてソリが合わなければいつでも席を蹴って立つことだってできる。さんざんに相手を罵倒してからおもむろにその場を去り、別の會社を見つけるのなんか、別にたいしたことじゃない。[注：新人社員の] 君だって會社のボスよりずっとビックになれるんだ。また採用された時に、會社があつらえた小さな靴をはいたものの足がだんだん大きくなり、それにつれて痛みを感じるようになることがあるだ

孫睿 “青春三部作” に見る「虚無」の位置づけ (高屋) [27]

ろう。その時、会社のボスというのは自分のオフィスに隠れて、君が苦しんでいる様子を密かに笑いながら、君の価値を搾取しているわけだが、にも関わらず君はボスの命令に従わざるをえない。(p291)

会社勤めをする誰もが新人社員としてスタートし、会社のヒエラルキーの最下層に甘んじなければならない。注意すべきは、最下層が単に給与額を指すのではなく、雇用者や上司への口の利き方や振る舞い方など、常にその上下関係を意識させられることに意識が向けられ、その上下関係の中で自身の“価値”、即ち存在意義が搾取されることに他ならないと憤っている点である。

大學時代にはたとえ劣等生であっても、成績だけで學生が一元的に序列化されるわけではなく、成績による序列化が何の意味も持たない現実を蔑むことで、悪友同士が連帯して互いの“価値”を承認しあっていたと言えよう。それに対して、自分より能力に劣る上司を軽蔑し、自分の方がもっと高い“価値”を備えているのだと邱飛が内心考えたとしても、職場でそれを実際に口に出せるわけではなく、また厳然と存在する上下関係の中で、邱飛が期待する“価値”は周囲から承認される気配もない。誰からの承認もない以上、自分の“価値”は自分一人で主張するしかなく、邱飛は辞職を叩きつけることで自身の“価値”を捨て身で表現しようとする。もっともこの時に表現される邱飛の“価値”は具體的内容が本人にも意識されているわけではなく、自分の“価値”はこの職場だけで測られるものではない、という一種の現実拒否として現れるに過ぎない。

とりたてて実績があるわけでもない新人社員が、入社早々、その存在“価値”を周囲から認められる環境などそうそうあろう筈もなく、邱飛の就職先は決まらずにモラトリアムが續行される。存在“価値”が即座に現れる職場が現実にならなければ、邱飛は自分の精神的優位をいかにして確信しうるのだろうか。

## 5 おわりに

就職では現実の利害や上下関係に配慮するため、不自由な振る舞いを強いら

れることに邱飛は憤慨するが、憚ることなく自身の精神的優位をぶつける対象が存在しないわけではない。例えば日本企業の面接に行った邱飛は、日本人擔當者と若い中國人通譯の關係に、かつて政治的・軍事的に蹂躪支配した日本と中國の關係を重ね合わせ、人を喰ったような應答で侮蔑を言外に覗かせた後、憤然とその場を立ち去り愛國的な義憤をぶつけている。この日本人擔當者の具體的言動に問題があったという記述は一切なく、邱飛にとっての日本が無條件に自分よりも低い地位に位置づけられ、彼の精神的優位を證明するのに利用されているのが伺えるだろう。その意味では出稼ぎ労働者など自分たちよりも社會的階層が劣っているとされる存在カテゴリーに日本人が入れられており、随時、憤懣をぶつけることで精神的優位を確認しうるのだろう。

また『草様年華Ⅱ』では會社をクビになった邱飛が、古巢の大學に戻り大學院をめざしモラトリアムを繼續している。かつての惡友らも各自の事情で大學に戻り、經濟的に苦しいことを除けば、職場の上下關係で屈辱的な思いをすることもなく、精神的には自由で大きな不満があるわけではない。小説中で自分が現實にはまだ何者でもないという事實が痛みを伴って現れるのは、例えば戀人を巡ってライバルが出現した時である。エリート會社員のライバルとの差は傍目には歴然としている。しかし自家用車を乗り回し社會的成功を見せつけるライバルに對し、車内のBGMが“出稼ぎ労働者でも口ずさめる”歌で“何のセンスもない”(p141)と邱飛はこき下ろし、内心ライバルに對する優越感を覺える。自分たちより社會的・文化的階層が劣っていると見なす出稼ぎ労働者にも歌える曲であることを理由に挙げ、ライバルを文化的階層の下位に位置づける點は興味深い。つまりセンスとは單なる趣味の相違・善し惡しの問題ではなく、社會的な上位者と下位者を序列化する装置となっていることが伺える<sup>13)</sup>。勿論、センスを巡る上下關係も邱飛が考えるほどに客觀的かつ自明なものではなく、主觀的な勝利に止まっていると言えるだろう。日本やセンス等がそうであるように、現實では總じて一回的かつ主觀的な精神勝利の快樂を貪ることしか、己の精神的優位を確かめる術が残されていないことが見てとれる。

本稿では孫睿の青春三部作における「虛無」表現を檢討してきたが、自身が置かれた「虛無」的狀態を対象化し語ることは、單に現實社會に對する主人公たちの「虛無」感が投影されているだけではなく、現實には耐えられないほど

軽い己の存在意義に反旗を翻し、精神勝利法によって何ほどか重さを加えようとする抵抗の現れと結論されよう。頑なにモラトリアムを続ける孫睿の小説に登場する若者たちが、自分に割り当てられる社会的ポジションを引き受けて大人になるのは、いったい何時のことなのだろうか。

注

- 1) 80年代世代作家が2004年に文学批評界の視野に浮上し、多くのシンポジウム等で議論の対象にされたとの記述が、朱大可・張闓主編、高屋亞希・千田大介監譯『Chinese Culture Review —— 中國文化總覽』vol.3 (好文出版、2006年7月) p28に見られる。曹文軒らの發言は同年11月22日、中國現代文學研究會・北京語言文化大學共催“走近‘80后’研討會”席上のもので、メランコリック創作の原文は“秋意寫作”。
- 2) 「虚無」は本稿の分析概念として用いており、それに相當する原文は「虚無」以外にも、「空虚」「虚度光陰」など複数の語が使われているが、文脈に支障がない限りは全て「虚無」に用語を統一した。
- 3) 『滴泪痣』(中國青年出版社、2002年4月)。李修文は1975年生まれ。また同小説については拙稿「李修文『泣きぼくろ』に見る村上春樹受容の一端—— SMをめぐる綺想」(早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第31期、2005年12月)を参照されたい。
- 4) 孫睿は1980年生まれ。1997年に北京師範大學に入學、2002年卒業。『草樣年華——北X大的故事』(遠方出版社、2004年1月)「編者前言」には、2001年にネット上で發表された同作が支持を集め、翌2002年にサイナネットの編集者の目にとまり、同サイトに連載され更に多くの讀者を獲得、加えて2003年にフランクフルト・ブックフェアで海外出版社から翻譯出版のオファーが多數舞い込んだと報道されたことから、中國メディア注目的となり、出版の運びとなった等の経緯が書かれている。但し海外で高い評價を得たとの報道は實際に翻譯された形跡がなく、著者・出版サイドが虚實入り交じった誇大宣傳でブームをしかけた可能性もあろう。
- 5) 第1作出版後、第2作『活不明白』(雲南人民出版社、2004年8月)、第3作『草樣年華II——後大學時代』(長江文藝出版社、2005年9月)の青春三部作を刊行。第3作は第1作の登場人物をそのまま使った續作だが、第2作は内容的に獨立している。また他に短編小説集『朝三暮四』(北京出版社、2006年6月)が出版されている。
- 6) 1999年以降、大學生募集枠の急激な擴大が行われることで、大學生の社会的價値が急速に低落したが、孫睿が募集枠擴大以前の1997年に入學を果たし、大學卒の價値が下がった2002年に卒業しているのは、孫睿の小説を考える上で重要であろう。
- 7) 成績以外に、女子寮の覗きや自轉車窃盜等の行爲も描かれている。出版界で劣等生や不良學生の表現に市場價値が見出される契機については、別稿で論じて

[30] 中國文學研究 第三十二期

みたい。

- 8) こうした意識については、孫睿に限らず同時代中國の小説では広く見られる。例えば拙稿「劉波『爲難情』に見る「考X」言説——「實現されない私」というトボス」(早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第30期、2004年12月)参照のこと。
- 9) 孫睿とクンデラとの間に影響関係があるわけではないが、同時代中國のクンデラブームを考える時、こうした「虚無」表現の参照にされた可能性があると考えている。
- 10) モロトリアムの社會的浮上自體が近年のことであり、このことと青春小説の登場には密接な關連があるだろう。例えば林少華は「村上春樹の文學世界と中國現代青年の精神構造」(和漢比較文學會・中日比較文學學會編『新世紀の日中文學關係——その回顧と展望』勉誠出版、平成15年8月)で、村上主人公が“成長しない子供”のようで、獨りっ子世代で精神的に未成熟な現代中國の若者に受容される要因の一つと指摘しており、村上が青春小説として讀まれているのが伺える。また村上が初めて翻譯されてからブームになるまで約10年のタイムラグがあることは、藤井省三が「開往中國的村上慢船——村上春樹在中國以及中國在村上文學」(『東亞文化與中文文學』〈東亞現代中文文學國際學報〉第2期香港號、明報出版社、2006年2月)で指摘しており、中國で青春小説というジャンルが登場する20世紀末になってようやく、村上の本格的ブームが始まることは非常に示唆的であろう。
- 11) 孫睿はインタビューに答えて、自分たちが上の世代と比べ精神面は集團主義的束縛を脱し、個性的かつ多様な方法で生活を明晰に理解するのが可能な一方、實際の生活面では行動が制限束縛されるアンバランスに置かれており、そうした現状に對して理想に基づいて己を實現できない憤懣や困惑を表現している、という趣旨の發言を行っている。陳香「孫睿：我的青春憤怒迷惘」(『中華讀書報』2004年3月31日)参照のこと。
- 12) 「虚無」に對する態度は様々な方法で表現される。例えば春樹『北京娃娃』(遠方出版、2002年5月)で主人公が語る自殺願望も、現實に價値を置かないという態度を表明することで、現實に固執する相手への精神的優位を表現しよう。
- 13) 邱飛の音樂趣味が穴あき版テープ(打口帶)で培われた経緯が『草樣年華』に見られる。穴あき版テープや海賊版CDの文化的意味については、「中國“盜版事業”和“Saw-gash Generation”」(『波西米亞中國』、廣西師範大學出版社、2004年5月)等、顏峻の一連の批評に詳しい。

本論文は日本學術振興會科學研究費・若手研究(B)「21世紀中國大衆消費社會における文學現象の研究」(2006年度 課題番號17720073、研究者代表：高屋亞希)による成果の一部である。